

北海道上士幌町

1. 地区概要等

(1) はじめに

近年、上土幌町では定住人口の減少、観光客の減少などに直面している。現在、町では地域活力を高めるため、都市部からの人材誘致、人的交流によって新たな地域づくりに取り組む方向性を持っている。また、2007年問題と言われる団塊世代の大量退職を迎え、それらの世代を地域に取り込むための方策が、全国各地で進められている。

上土幌町の地域活力を向上させるためには、都市部からの移住・二地域居住者を増やすことにより、地域の経済活動や文化活動などを活性化することが有効であると考えられる。一方で、これまでのように農村地域からの情報発信だけでは効率的に人を呼ぶことは難しい。

そこで、本調査では、上土幌町と都市部の企業との連携により、地域の課題の解消と都市住民のニーズへの対応を両立するシステムを構築する。都市部の企業等の協力により都市住民を一定期間上土幌町に受け入れ、町の魅力や生活を体験してもらいながら、ライフスタイルとしての上土幌町における二地域居住や、上土幌町の受け入れ体制の課題や可能性を検証するとともに、上土幌町と都市部企業との連携システムの可能性について検証することを目的とする。

(2) 上土幌町の概要

上土幌町は十勝平野の北端に位置し東西 18.2 km、南北 48 km と南北に長い地形の町で、面積 695.87 km²、その約 76% が森林、14% が農地の農業と林業を基幹産業とする町である。また、糠平温泉などの温泉と、スキー場、豊かな自然を背景とした観光の町でもある。

町の総人口は減少傾向が続いており、1985 年からの 20 年間で 1,813 人減少し、特に少子高齢化の傾向が強く、年少人口が 5 割弱の減少率を示しているのに対し、高齢人口は 7 割弱の増加率を示している。

また、商店数の減少及び商店就業人口の減少が進み、さらに観光入込数も減少している。特に観光客数のうち、宿泊者数の減少傾向が続いている。

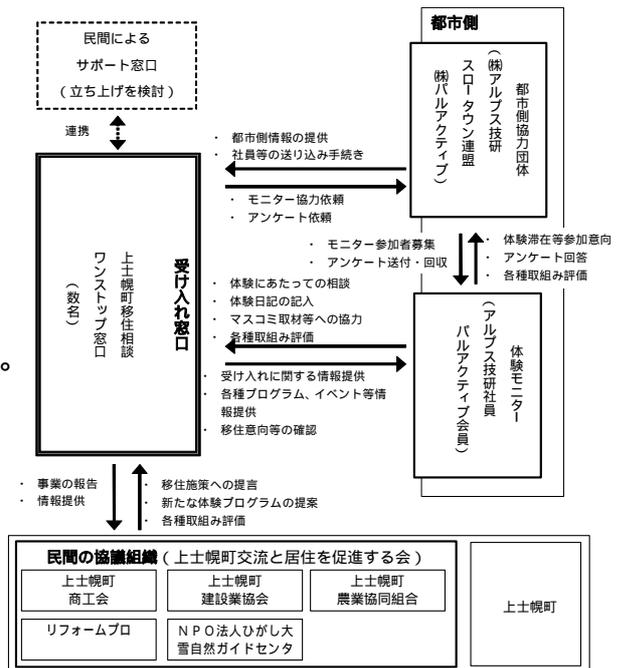
【上土幌町の概要】

人口推移	年次	1985	1990	1995	2000	2005
	総人口(人)	7,042	6,380	5,936	5,634	5,229
	高齢化率(%)	11.47	15.45	19.58	24.20	30.10
	世帯数(世帯)	2,393	2,213	2,191	2,232	2,215
	人口増減	- 529	- 662	- 444	- 302	- 407
面積	総土地面積：695.87 km ² (耕地：116.61 km ² 、林野：533.97 km ²)					
気象状況	平年値気温：5.4 平年値降水量：915 mm 平年値降雪深さ：52 cm 平年値日照時間：1,873 時間					
平均地価	住宅地平均価格 4,000 円 / m ²					
財政力指数	0.25					
交通アクセス	東京から飛行機で 1.5 時間 とちぎ帯広空港から車 70 分					

2. 調査概要

(1) 上土幌町における共生・対流システムのモデル

今回の調査を通して実現を目指す、都市と上土幌町の共生・対流のシステムは、特定のターゲットとの長期的、反復的な交流である。今回は上土幌町と以前から関係のあった株式会社アルプス技研及びスロートウン連盟と、そこからの紹介による株式会社パルアクティブの3団体の協力のもと、上土幌町との連携システムを構築する。アルプス技研からは、企業の福利厚生としての社員を送り出し、会員制リゾートクラブを持つパルアクティブからは、会員へのサービスの一環として会員を送り出し、上土幌町での生活を体験してもらう。



移住定住や二地域居住、長期滞在の定着に向け、都市住民の新しい生き方・暮らし【上土幌町における共生・対流システムのモデル】方のニーズと、町の取組みをマッチングさせるための仕組みづくりとして、都市住民の受け入れ相談から滞在中の生活全般にわたる相談窓口づくりや、町と町内の協力企業・団体や都市部の協力団体との連携システムを構築し、計画 実行 評価 改善のサイクルを確立することを目指す。

(2) 各主体の役割と連携による効果

ア 受け入れ窓口

受け入れ窓口は、「上土幌町移住相談ワンストップ窓口」が担う。連携システムの中核を担う組織として、モニターへの対応や、都市側協力団体や民間の協議組織との協議を行う。都市側協力団体や民間の協議組織との連携により、受け入れ窓口からの一方的な情報発信に比べはるかに効果的なモニターの募集が期待でき、さらに新たなビジネスを創出して町の経済・文化等活動が活性化することを期待する。

イ 民間の協議組織

民間の協議組織は受け入れ窓口への政策提言や事業の評価を行う。組織する主体は町内の事業者等であり、今回の事業への参加による受け入れ窓口との迅速な情報交換は、移住・二地域居住に関連する新たなビジネスを進めるに当たってのメリットとなる。

ウ 都市側協力団体

都市側協力団体は、窓口からの募集情報を自らの社員や会員に発信し、モニターの参加を受け付ける役割を担う。社員や会員へ、田舎暮らしや一時的な滞在によるリフレッシュの機会を与えることや、第二の人生としての移住や二地域居住のきっかけを与えられることで、社員の福利厚生や会員サービスの満足度が高まることを期待する。

(3) 生活体験の対象、期間等

以下に生活体験の対象、期間等を示す

	株式会社アルプス技研の場合	株式会社パルアクティブの場合
対象	全社員（約 2,500 人）を対象（40～50 代社員を中心とした層が主な対象）	全会員（約 9,000 名）を対象
参加条件	将来、北海道への移住や二地域居住をお考えの道外在住の方。 簡単な日記の記入、アンケート調査、マスコミ取材等にご協力頂ける方 ホームページへの日記及び写真掲載、調査データ等の活用に対する承諾を頂ける方。	
受け入れ期間	平成 18 年 10 月から平成 19 年 2 月末	
滞在日数	2泊3日～1週間程度	
情報提供	全社員を対象にアルプス技研ホームページでモニター募集の周知（10月） 50代社員（53名）を対象に、詳細な案内を郵送（10月） 全社員を対象に詳細な案内をメールで送付（12月） 冬期間の楽しみメニューをメールで送付（1月）	全クラブ会員を対象にパンフレットを送付してモニター募集の周知（10月） 問い合わせのあった方に詳細な資料を送付（逐次） 会報誌に募集記事を掲載（12月）
補助	交通費、宿泊費、レンタカー費、体験メニュー費を補助 アルプス技研共済会からの補助を加え、モニターは出発地に関係なく2万円の負担	交通費、宿泊費、レンタカー費を補助

(4) 生活体験の概要

以下に生活体験の概要を示す

滞在中の過ごし方 (プログラム内容)	<p>【自然体験、スポーツ体験プログラム】 カヌー体験、ワカサギ釣り体験、ネイチャースキー、スノーシューハイク、湖・川釣り、山菜きのこ採り</p> <p>【史跡体験プログラム】 廃線の国鉄土幌線アーチ橋見学ツアー、エコレール体験付きアーチ橋ツアー</p> <p>【インドアプログラム】リース作り教室、森の香水作り、温泉めぐり</p> <p>【スポーツ体験】 スキー、ゴルフ、パークゴルフ、熱気球体験</p> <p>【その他】 定住促進住宅地（みなみ野団地）を見学</p>
宿泊場所	<ul style="list-style-type: none"> ・町内の公営住宅、民間企業の社宅 ・町内のホテル・旅館にて滞在（短期滞在の場合）
滞在費用（宿泊費等）	<p>住宅家賃：一組1ヶ月 35,000円から 45,000円（光熱水費含む）</p> <p>ホテル・旅館：一人一日 4,600～12,000円</p>
参加要件	<ol style="list-style-type: none"> 1 将来、北海道への移住や二地域居住をお考えの道外在住の方 2 主に団塊世代前後の夫婦 3 簡単な日記の記入、アンケート調査、マスコミ取材等にご協力いただける方 4 ホームページへの日記及び写真掲載、調査データ等の活用に対する承諾をいただける方。

(5) 評価、検討

モニターを対象として、事前、事後アンケートを実施し、生活体験に期待することや参加のきっかけ、生活体験の満足度や移住意向について把握する。

また、町の民間団体へのヒアリングにより、本事業推進に対する各団体の意向を把握し、民間団体の組織化に向けた検討を行う。

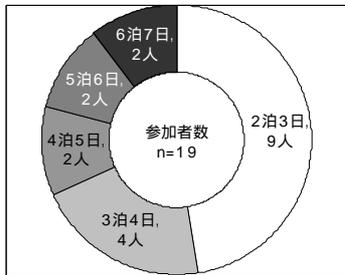
3. 調査結果・成果

(1) 生活体験の結果概要

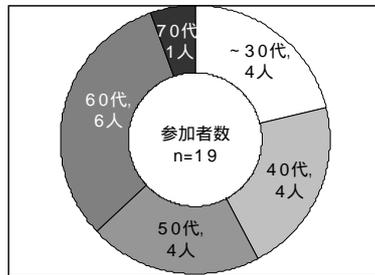
生活体験のモニターは15組19名であった。滞在日数を見ると、2泊3日の短期滞在者が最も多いが、全体的にアルプス技研からは短期滞在、パルアクティブからはやや滞在日数の多いモニターが見られた。年齢は、60代が6名と最も多いが、その内訳を見るとアルプス技研からはやや若い層、パルアクティブからはやや年齢の高い層が多く見られた。モニターの現住所は、首都圏が12名と多いが、関西圏も6名見られた。特に夫婦、親子で参加し、4泊～6泊した3組は全て関西圏からの参加であった。

一方で、参加問い合わせは数多くあったものの、受け入れが秋から冬にかけての時期であったことや周知期間の短さによって、今回の参加を断念した方も多く見られた。

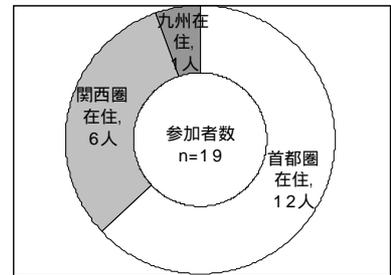
【モニターの滞在日数】



【モニターの年齢】



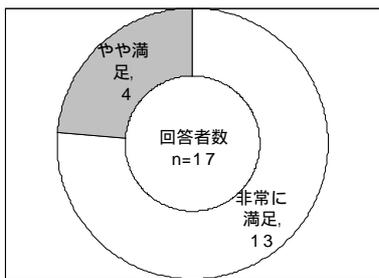
【モニターの現住所】



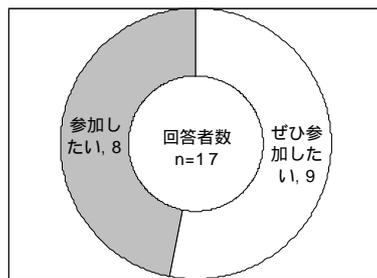
ア 生活体験の満足度、再参加意向

生活体験の満足度は高い。回答者全てが「非常に満足」もしくは「やや満足」と回答している。また、再参加については「ぜひ参加したい」、「参加したい」との回答がアンケート回答のすべてを占めており、モニター全員がもう一度生活体験に参加したいとの意向を持った。

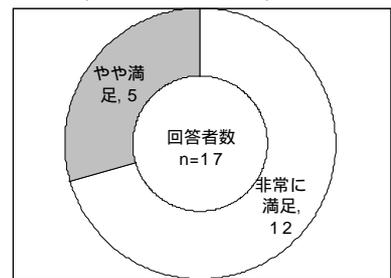
【生活体験の満足度】



【生活体験の再参加意向】



【住居(ホテル・旅館)の満足度】



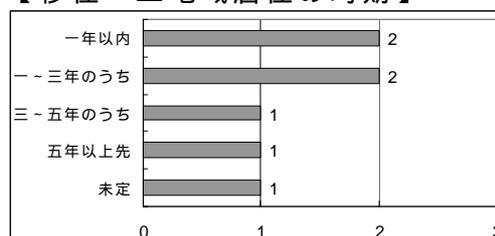
イ 移住・二地域居留意向

上土幌町への移住・二地域居住を考えているとの回答が6名いる。また、その時期は一年以内の移住・二地域居住を検討している方が2名(夫婦)、1～3年のうちとの回答が2名から得られた。

【移住・二地域居留意向】



【移住・二地域居住の時期】



(2) 生活体験の成果と課題

ア 生活体験阻害要因とその解消について

情報不足による上士幌町及び北海道での暮らしに対する都市住民の不安感については、都市側協力団体の担当及びワンストップ窓口との生活体験申込時からの情報交換により解消に努めた。事後アンケートによると、当初持っていた不安が解消されている。このような体験談を、来訪を検討している方への参考意見として情報発信することは有効である。

また、都市住民の受け入れ準備や、具体的なニーズを把握していないことに対する上士幌町側の不安感についても、モニターと受け入れ窓口等との生活体験申込時からの情報交換等により解消に努めた。ただし、モニターのニーズについて、完全には把握できた訳ではないため受け入れ側として不安を感じる部分はあったが、生活体験後のアンケートによる高い満足度から、モニターのニーズに一定の対応ができていたと判断することができる。

イ 町の経済効果

経済効果に関しては、今回の調査を先行投資として考える必要があるため、消費額を経済効果として計ることにあまり意味がないものの、今回 15 組 19 名のモニターにより、合計で約 200 万円の消費、その内町内での消費分としては、約半分の約 100 万(現地レンタカー、宿泊、食費、体験メニュー代、お土産その他)であった。町内での消費を喚起するために、体験メニューの充実や、地産の商品や食事メニューの開発など、新たなビジネスの創出による町の魅力付けが必要である。

ウ 町民の意識啓発効果

町民への意識啓発効果としては、短期滞在用に利用した町内のホテルや旅館に、特別料金を設定してもらうなど、事業への協力を得られた。また、今回の事業をきっかけに民間の協議組織として、町内の各種団体(商工会、農協、建設業協会、NPO法人など)が参画した「上士幌町交流と居住を促進する会」(以下、促進する会)が立ち上がるなど、都市農村交流について検討を始めている。

今後も促進する会では移住・二地域居住、都市農村交流に関する検討を継続して行い、町のまちづくりビジョンの共有に取り組むとともに、町民、町内の企業・組織に、移住・二地域居住、都市農村交流事業の可能性を感じてもらうために、生活体験者の案内役を担ってもらうことや、町内外での継続的なPR活動や講演会・シンポジウム、勉強会などの開催を検討する。

エ 都市部へのPR効果

今回の調査におけるシステムでは、全国展開する企業の協力のもと、社員や会員という的確なターゲットへの情報発信を、非常に低コストで実施することができた。当初の想定どおりのモニター数を確保できたことと、問い合わせ件数が多かったことから、PRに関して今回構築した連携システムが効果的に機能したと考えることができる。

オ 移住・二地域居住者増加の可能性

モニターの事後アンケートでは5名の方が「上士幌町への移住又は二地域居住を考えている」というとの回答を寄せている。季節移住を希望している方や、2週間程度の四季毎の滞在を望んでいる方など、上士幌町への移住・二地域居住を現実的なものとして考えている方と、この事業を通して出会うことができたことは、成果として大きい。今後のフォローが重要である。

(3) 新たなシステムの可能性について

ア 都市側団体との連携の効果

今回、上士幌町とアルプス技研、スロータウン連盟、パルアクティブとの連携システムを構築し、社員や会員への情報発信や受け入れ窓口との連絡体制づくり、作業分担や経費負担の取り決めなどを行った。特に情報発信や申込受付等については、協力団体も実作業を担当した。この関係を構築できたこと、及びこの連携システムによって、モニターが確保できることを検証できたことが成果として挙げられる。

イ 今後の連携の方策

アルプス技研、パルアクティブともに、今回の事業を来年度以降も継続したいとの意向を示しているが、課題もある。特に、アルプス技研との連携については、現役世代を対象とした生活体験であることから、移住・二地域居住のニーズを持つ層だけではなく、観光や一時的なリフレッシュを目的とした来訪をターゲットとすることも必要であることを認識した。継続的な事業により、将来的な移住・二地域居住への展開を期待するという長期的な視点も必要である。

また、都市側団体との連携については、本年度連携した3団体との関係を続けながら、他団体との新たな連携を創出することも検討する。また、都市側団体としても、上士幌町だけではなく、上士幌町の周辺市町村を含めた連携により社員や会員の満足度を高めることが求められる。

ウ 上士幌町における受け入れ窓口について

今回の受け入れは、役場移住相談ワンストップ窓口を中心に行った。行政として受け入れ窓口を運営することのメリットは、相談者へ与える安心感や受け入れ側協力団体、都市側協力団体、他市町村などの広域連携においては有利である。一方で、行政だけでは人手不足からサービスを十分に提供することが難しく、また行政には公平性が求められることから、特定の民間事業者との連携や、協力関係を得ることにっては慎重を要する。

そこで今後は、民間によるサポート組織を立ち上げ、行政のワンストップ窓口とともに受け入れを実施することを検討する。今回の調査のなかで立ち上げた促進する会においても、民間のサポート組織の立ち上げの必要性については確認しており、人材の確保と組織の活動資金の確保という課題を解決しながら、来年度以降早急に立ち上げることを目指す。

エ 受け入れ施設について

今回利用した教職員住宅に対しては、町に近くて便利、清潔で適度な広さなど、利用者からは概ね好い印象が得られた。また、モニターの意向としては、一定期間滞在できるウィークリーやマンスリー契約で借りられる住居を希望するなど、過大な投資をせずに利用できる住居があれば十分という意見が得られている。しかし一方で「もっと魅力的な上土幌を体感してもらうためには教職員住宅では不十分である」という地元の意見もある。

そこで、長期滞在用の施設としては、市街地の教職員住宅以外にも、農村部や山間部への設置を検討するとともに、ホテル・旅館の食事相互利用の推進など、使い勝手の良い施設連携の仕組み構築を検討する。

4. 今後の方向性

(1) 生活体験事業の継続

今回の調査で構築した関係を継続し、アルプス技研、スロータウン連盟、パルアクティブとの連携を継続するとともに、新たな連携先を探しながら生活体験事業を拡大していく。

また、体験メニューを充実するため、地元の活動組織や農家との連携を積極的に図り、特に地域との交流メニューの実施検討を進める。

(2) PR方法の検討

今回実施した情報発信は、各組織から社員や会員へ直接情報提供する方法である。コストの面からも、個人情報セキュリティの面からも非常に有効であるため、今後も今回実施した方法での継続的な情報発信を行う。

なお、移住・二地域居住など都市農村交流を推進するにあたっては、やはり特定のターゲットだけではなく、より広いターゲットに向けた情報発信が必要であることから、新聞やテレビなどマスメディアの活用についてもあらためて進める必要がある。

(3) 民間の受け入れに向けた継続的取組み

ア 促進する会におけるまちづくりのビジョン共有

今回立ち上げた促進する会において、移住・二地域居住、都市農村交流に関する検討を継続して行い、上土幌町の今後のまちづくりビジョンの明確化と共有に取り組む。

イ 民間サポート窓口づくり

上土幌町役場は、行政としての信頼感、これまでに蓄積したノウハウを活かして今後も継続的に受け入れ窓口としての機能を担う。

加えて、民間のサポート組織を立ち上げ、移住・二地域居住者や体験滞在者、観光客などの来訪者への情報提供や相談対応、広域的な対応などのサービスを行い、行政の受け入れ窓口と連携しながら移住・二地域居住、都市農村交流事業を進める。

(4) 受け入れ施設等整備

生活体験により町の魅力を知ってもらうための滞在施設を、市街地の教職員住宅以外にも、農村部や山間部のロケーションの良い場所へ設置することを検討する。また、移住希望者の住居や宅地の需用に対応するため、空き家や、不正形で使用し難い農地の活用推進方策を検討する。

5. 総括

本調査における成果、課題と今後の方向性は以下の通りである。

成果	<p>【生活体験阻害要因とその解消について】</p> <p>情報不足に由来する北海道での暮らしに対する都市住民の不安感及び、受け入れる上士幌町側の不安感を、ワンストップ窓口による情報提供、相談対応及び、実際の体験により解消した。</p> <p>【町民の意識啓発効果】</p> <p>町内の各種団体による「上士幌町交流と居住を促進する会」を中心として徐々に理解が得られている。今後、促進する会でのまちづくりビジョンの明確化と共有を徹底するとともに、広く町民への理解を図る。</p> <p>【都市部へのPR効果】</p> <p>今回の調査におけるシステムでは、的確なターゲットへの情報発信を、非常に低コストで実施することができた。当初の想定どおりのモニター数を確保できたことから、概ねのPR効果があったものと考えられることができる。</p> <p>【移住・二地域居住者増加の可能性】</p> <p>今回の調査を通して、上士幌町への移住・二地域居住を現実的な問題と考えている方に出会うことができたことは、成果として大きい。なお、これらの方は季節移住を希望している。今後のフォローが重要である。</p> <p>【都市側団体との連携の効果】</p> <p>アルプス技研、パルアクティブとともに、今回の事業を来年度以降も継続したいとの意向が示されているが、今回得た課題をふまえて、連携方法の改善を図りながら、協力関係を継続する。</p> <p>【受け入れ施設について】</p> <p>今回利用した教職員住宅に対しては、町に近くて便利、清潔で適度な広さなど、利用者からは概ね好い印象が得られたが、より魅力的な上士幌町を体感してもらうため環境の良い地域に長期滞在用の施設整備を検討する。</p>
今後の方向性	<p>(1) 生活体験事業の継続</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回の2団体との継続的な連携及び新たな連携先探し ・ 地域との交流メニューの充実 <p>(2) 広範囲への情報発信を含めたPR方法の検討</p> <p>(3) 民間の受け入れに向けた継続的取組み</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 民間受け入れ組織におけるまちづくりのビジョン共有 ・ 民間サポート窓口づくり <p>(4) 受け入れ施設整備検討</p>